

対談に見る司馬遼太郎(4)

－ 5つの対談集のまとめ －

A study on Ryotaro Shiba through the dialogues (4)

全 彰煥

Changhwan John

【Abstract】

The main subject compiled the summary of three papers about five dialogues of Ryotaro Shiba — “The Japanese and Japanese culture”, “The will to the Japanese”, “Think about the Japanese”, “Think about the history”, “The faces of Japanese” —. The study method classified direct references of Shiba in “Time distinction”, “Item distinction” and investigated it.

I has given “Times subdivision” as one of the characteristics of historical view of Shiba in a precedent study. We understand that he finely divides the history, politics and the times into case distinction, person distinction and times in others of “Bright Meiji, Dark Showa” from the document of the summary. After all, I thought that Shiba recognizes the history as “a point” not “a line” and the connection of the “point” concerning “length” not the plane “side”. Therefore, there are only “winners” and “heroes”, and not the general “common people”. And I think that he liked “bravely ferocious samurai” and “common people” as its original form of which has fallen into the contradiction that cannot be compatible.

In the history and the politics, there is the submission of the problem based on an objective judgment but little suggestion of a solution or new thought in there. But we must appreciate that he calls for the acuteness of land problems of the capitalism and suggest “a land deposit system” and practiced it by himself. After all Shiba is not only a historian but also a thinker. I cannot but say that he was “Only superior documentarist” knowing a lot of about the history.

In the reality recognition, it is thought that he was “an idealist of the pessimistic inclination”. This is something like “Sense of the vanity of life in the Buddhism” so that suggests it by himself, and it may be said deeply associate with his historical view point. So he felt pessimistic sense of the vanity of life for the history and heroes and might always look forward to new heroes.

Finally I think that the tendency that the character of his work is recognized “as a new person in the works not a person in the history” among Japanese people should be studied through an individual work theory.

Key words：「司馬遼太郎の対談集」－ “Dialogues of Ryotaro Shiba”. 「司馬史観」－ “The SHIBA's viewpoint of history”, 「歴史細分化」*－ “The historical subdivision”

* 論者は先行研究で、司馬氏の歴史観の特徴の一つとして「時代細分化」を挙げたことがあるが、今回のまとめ作業を通して、司馬氏は歴史研究家ではない立場から歴史的人物や事件を取り上げてきたこと等を勘案して、本論では「歴史細分化」と言い直している。

1. はじめに

論者はこれまでに3編の論考にわたって、司馬遼太郎（以下、司馬）が残した5つの対談集における司馬自らの言説に関する連続的な研究を行ってきた。本論はそのまとめの考察となり、取り上げた5つの対談集は以下の通りであるが、テキストの選定においては、ドナルド・キーン氏との

対談である『日本人と日本文化』の他は、対談の相手に拘わりなく年代別の代表単行本（いずれも論者基準）として選んだことを言っておきたい。

本研究ではこれまで考察してきた対談における司馬氏の直接的言説内容を対談時期と観点別に分類しその内容と変化の特徴について探ってみることにする。本論末に付した【資料】は、それを一覧表記したものである。

区分	書名	発行所	発行年(初刊)	対談者
1	『日本人と日本文化』	中公文庫	1972	ドナルド・キーン
2	『歴史を考える』	文春文庫	1973	萩原延寿・山崎正和・網淵謙錠
3	『日本人を考える』	文春文庫	1978	梅棹忠夫・犬養道子、他10人
4	『日本人の顔』	朝日文庫	1980	江崎玲於奈・黒田寿郎、他6人
5	『日本人への遺言』	朝日文庫	1999	田中直毅・宮崎駿、他4人

本論では、この【資料】の考察から見えてきた司馬の歴史観 — それは一般に「司馬史観」とよばれたりもするが — の特徴を紡ぎ出すことになると思う。

2. 5つの対談集における司馬遼太郎の表現言説の考察

本研究で取り上げた5つの対談集のそれぞれにおける特徴的な司馬の言説を抽出し、それぞれ私なりの考察を加えるならば、以下のようにまとめられる。

2-1. 『日本人と日本文化』

『日本人と日本文化』に表われている司馬の観点をまとめると、次のとおりである。

- (1) 朝鮮(韓国)の「小中華」と日本の「ミニ中国化」は似ていても違うし、朝鮮(韓国)は、小中華の過程で政治的自主性を失い、文学的遺産が作れなくて残せなかった。
- (2) 日本文化の特徴的属性は ① 女性的「たおやめぶり」 ② 閉鎖性 ③ 渋い ④ 銀の世界である。また、閉鎖の時代に日本らしいもの

が造られた。それは中国の六朝時代の南朝と百済と関係がある。

- (3) 司馬の好きな時代は ① 古代(上代)日本 ② 戦国時代 ③ 足利義政の東山文化期 ④ 江戸初期 ⑤ 明るい明治期である。
- (4) 日本人は原理に鈍感なわけで、大陸の儒学は「生活習慣や体制」ではなく、「倫理綱領」だけの形で受け入れられたので、日本武士の忠義はもっぱら主人との直接的な「犬の忠義」みたいなものである。仏教は、宗教ではなく「美」と「美意識」といった形だけで受け入れられた。より日本的なものは「禅」と「神道」である。
- (5) 戦争はページェントみたいなものであり、江戸時代全般は退屈だった。
- (6) 日本の近代化に貢献した外国人を再評価すべきである。

上記のまとめから、

- 1) 日本文化ならではの特異性を認める立場で、大陸の儒学と仏教が日本文化の根幹であるとする。さらに、儒学と仏教が「生活習慣

や体制」として定着していないという司馬の主張に対しては、疑問点があり全面的賛同はできない。

- 2) 朝鮮(韓国)の儒学と仏教が、非現実的に観念化しすぎてしまって弊害をもたらしたのは認めるが、それは半島国の地理的・政治的結果のものであると考える。また、科学的・実証的資料を大事にする歴史小説家としての司馬氏が、朝鮮(韓国)関係においてはそうでもなかったということを指摘したい。
- 3) 本書でもっと明らかになっている司馬氏の「歴史細分化」と日本文化の属性に対する認識は、彼の「現実認識」の問題と関係づけて判断する必要があると考えられる。

司馬史観は、部分的な歴史的現実の無視・漏れによる普遍性の欠如という致命的弱点が内在していてそれが右派保守系によって悪用されているにも係わらず、日本国民の圧倒的な支持を受けているし、司馬は「神様」として崇められている。実に彼の著作は、もう一億二千万部以上販売されているから、日本人なら司馬の著作を一冊以上は持っていることになる。そして、日本人は司馬の作品から「歴史的人物としての彼等」ではなく「司馬作品の登場人物として彼等」を愛しているという作品性を看過してはいけなないと考えられる。

2 - 2. 『歴史を考える』

『歴史を考える』で注目すべき表現は、次のとおりである。

- (1) 日本人には農村的現実主義がある。
- (2) 日本は、時代と現実に応ずる二流の正義の国で、徹底的な危機感がないから裏切りもできる。
- (3) 日本は、二流的行動の裏切りがあるために社会は安定し、ヒトラー的な大悪名もなかった。
- (4) 一人のヒトラーも出さずに太平洋戦争を起すなどというのは、深刻に考えなければなら

ない体質である。

- (5) 日本は、アジア侵略についても、もっと過激な無責任なことを言っている。
- (6) 中国人は、日本人に論理が消えて行動が始まることを警戒する。
- (7) 信長と秀吉は、大航海時代の潮流に乗ってわけである。
- (8) 征韓論から見た西郷の世界戦略は理論的には正しいが現実には合わなかった。
- (9) 人間の行動を美しくさせる基準、原理が侍社会にはあった。
- (10) 原理のない日本はあまりにも追い詰められたら、もう、武力しかない。

以上のまとめ資料(1)(2)(3)から解るように、日本は「農村的現実主義」を基に時代と現実に応ずることによって国と社会の安定を追求するから「裏切り」も可能で、これは「二流の正義」で、日本は「二流国家」だと自ら分析し結論づけている。論者は、歴史と政治において、日本の国家的水準付けに迷わされてきたが、司馬氏の言及を認めざるを得ない。

また、(3)(4)(5)は、司馬氏の戦争責任に対する認識を克明に示している。特に、日本は「ヒトラー的大悪名もない」し、「一人のヒトラーも出さずに戦争を起した」と「ヒトラー」云々するのに、ただ驚かざるを得ない。原理も歴史認識もない日本の政治と政治家に — 司馬氏は、歴史認識を持っていた日本の政治家は徳川慶喜が唯一だったと述べたことがある — もう希望的な期待はできないし、だから、近隣の国々が頻りに警戒しているのは当たり前のことである。

また、西郷隆盛の征韓論を否定的に述べたのにもかかわらず理論的には正しかったが、ただ現実には合わなかったと矛盾した発言をしているのが解る。そして、秀吉が大航海時代の乗ったわけだと肯定的側面で言っているのは、他の対談で一貫して朝鮮出兵の無謀さを批判したこと

反する所として指摘しなければならない。

最後に、侍の原理しか持っていない日本は、外国から追い詰められたら「武力」に頼るしかないと述べたのは、現実の政治問題に対して「悲観主義者」であった直接的証拠として挙げられると思う。

2-3. 『日本人を考える』

『日本人を考える』での項目別注目すべき表現は、次のとおりである。

■ 日本人・日本社会について

- (1) 日本は伝統的に「無層社会」で「社会的対流のいい」組織社会である。
- (2) 日本人は特定の思想に縛られない柔軟性のある「あつけらん民族」である。
- (3) 日本人は「Mass hysteria 現象」の危険性を持っている。だから、自分は国民的盛り上がり信用しない。
- (4) 「無抵抗平和主義」「多文化への同化」までも厭わない柔軟な社会を志向すべきである。
- (5) 日本は「建て前」と「内実」の二重性を持っている。
- (6) (当時の)学生運動は「共同幻想」に駆られて、排他的に「細分化」している。
- (7) 日本は「武」の統御から安定感が得られる「臨戦態勢の国」である。
- (8) 「侠(友)」の精神は縦割りの日本社会に合わない。
- (9) 外国人によく言われる「躍起な形相の日本人」は宿命である。
- (10) 日本の政治家は大体「口舌の徒」である。
- (11) 相対的思考をする日本人は「一人集中絶対権力への反感」を持っている。
- (12) 土地は共有すべきである。
- (13) 日本人には騎馬民族系の要素がある。
- (14) 日本は頭から単一民族である。
- (15) 天皇制は日本最大の発明品である。

■ 歴史・国際関係について

- (1) 江戸時代は「秩序美」の面で日本文明の頂点の時代であって、世界史上、文明をコントロールした唯一の例になる特異な時期であった。
 - (2) 織田信長の「思想的毒素」が好きで、彼の革新政治には近代的要素がある。
 - (3) 伝統的に日本は国際情勢に鈍感で外交も下手だった。太平洋戦争はその一例である。
 - (4) 日本は有史以来貧乏であった。
 - (5) 日本は、徳川慶喜以外に歴史認識を持っていた政治家はいない。
 - (6) 横の関係に歴史と伝統はない。
 - (7) 朝鮮は観念的「建て前主義」である。
 - (8) 中国はほぼ単一民族である。
- 思想・イデオロギーについて、
- (1) 思想はフィクションであり、その寿命は三、四十年ぐらいである。

■ 儒学・仏教について

- (1) 仏教は宗教と思想の生活規範ではなく、芸術の形として導入され定着したので、東南アジア諸国と食い違いがある。
- (2) 一神教は日本人に合わないし、自分も違和感を覚える。
- (3) 空海は最初から中国の真言密宗に着眼し日本で再編成した。
- (4) 日蓮宗は古代日本人の活発さを煽りだす力がある。
- (5) 陽明学も一部支配層に王陽明の「気分」「生氣」だけが日本人の何らかと結びついている。

■ 人間・人類について

- (1) 人間はアホで文明と心中しようとする。
- (2) 人類の滅亡はやむを得ない。
- (3) 変化に柔軟であつけらん日本人の「望ましい舵取り方」は、神に頼るしかない。
- (4) 現代の民主主義はもう電池切れにかかっているから、「偉大なる支配者」による「新しい猛烈な思想」が望まれる。

以上から、司馬氏が社会の現実・現状について割と客観的に分析し、問題点を提起していると思えるが、それに関する解決策が見当たらないのを指摘したい。そして、「理想主義的性向」と人間に対する「悲観的認識」を指摘したい。

2 - 4. 『日本人の顔』

『日本人の顔』で注目すべき表現は、次のとおりである。

- (1) 日本には古代があったというよりも未開時代があったというべきなのではないか。
- (2) 古代日本地域は未開地帯だから、文明の意識と技術を身につけて朝鮮半島からやってきて文明を扶植した場合、「渡来」という言い方がリアリズムである。
- (3) (鎌倉期)は、人の田地を武力で取ったりすることも公認する体制であったから、猛々しき競争を認めた体制とも言える。ここでアジア離れするわけである。
- (4) 百済は、人口も少なく、五百万もいればいいほうじゃないか。だけど、五百万ごと来ても、入植できるだけの地方は近畿地方でさえたくさんあった。百済の上層階級は日本の官僚を形成するし、農民階級は山野の地主になる。
- (5) (当時の密偵で生き残った連中)彼らの聖像は神功皇后だったことに賛成する。
- (6) 常識から言って、神功皇后的な征韓行動というか、エネルギーというか、そういうものは低い生産しかない地域で成立しっこない。日本では鉄器の大量生産は六世紀からなんだから。
- (7) 明治の陸軍参謀本部が、日本史を、つまり明治の歴史観をつくることの母体もしくは推進役、もしくは刺激剤の役目を果たしたというのは、私に資料がすくなくてよくわからない。
- (8) 日本の参謀本部がつくられたと同時に、参謀

本部の一番優秀な連中がスパイになって — 主に朝鮮、中国に — 派遣されるのが常例になっていた。

- (9) 十九世紀のヨーロッパは異常の帝国主義時代で、日本が強国になるには侵略する — 例えば「征韓論」 — 以外にないというのは心理的にあるもので、正義であった。
- (10) 土地は原則としては、共有のものである。この土に生きている百姓は無競争の心をもつ。これが朝鮮半島の百姓の姿で、今もその匂いを残している。
- (11) 朝鮮船が漂着したというのは、面白い言い方だし、日本史の中でまだ光のあたっていない部分である。
- (12) 中国も朝鮮も半乾燥地帯で、日本のようなモンスーン地帯に比べれば、樹木の復元力が少ない。
- (13) 山を裸にする技術、その技術の上に古代冶金文明が出来上がる。そして世界でも稀なくらい森林の復元力の盛んな日本で、鉄器が栄えるのは当たり前であった。

以上のまとめから、日本史において、古代より未開時代があったと言うべきだとのいうことと渡来人という用語をリアリズムの面で見ている司馬氏の観点、そして日本のアジア離れが鎌倉の武士文化の定着からであるという意見には、大旨同意する。

百済の渡来人に関するまとめ資料(4)の表現についての論者の意見は次のとおりである。

- 1) 渡来人自らの正体性確保・維持に失敗してしまったという推論
- 2) 渡来人政治勢力に対する歴史的評価に重大な欠如がある可能性
- 3) 日本文化の包容性、すなわち、アメリカ式の「Melting Pot」みたいな文化収容能力が作用したのではないかという推論が挙げられると思う。

まとめ資料の(5)(6)と(7)(8)は、本書で一番目立つ矛盾な所である。特に、対談のかけ離れた所でもなく、問答の前後の即答であることを勘案すると、返事に困った時の言い回しか、迂回した認めである印象を拭えない。

資料(9)は、征韓論者別の否定的判断とは別の認識を表している。(10)で、司馬氏が言おうとしたのは何であったのかよく解らない。また、当時韓国の土地問題や農業・農村の現実には反映されていないのを指摘したい。資料(11)(12)(13)は、部分的誤解や間違いの可能性を挙げたい。

2 - 5. 『日本人への遺言』

『日本人への遺言』に表われている司馬の観点をまとめると、次のとおりである。

- (1) 現代資本主義の土地問題を深刻に認識し、問題解決のためには経済論理ではなく、倫理的・哲学的に接近しなければならない。
- (2) (司馬氏は) 土地公用制に関心があったが、現実的には土地供託制を提案して、それを自ら実践した。
- (3) 太平洋戦争は「捨て鉢で始めた戦争」であって、明治軍事政権の陸軍に対しては否定的に、海軍に対しては肯定的な立場を堅持していた。
- (4) 倫理綱領としての「礼儀作法」は大事なものである。
- (5) 日本人と日本文化について「集団ヒステリー」「ペロンとした国」「原理不足の文化」「国際化に苦手」な面がある。
- (6) 神秘主義に反する合理主義者でありながら、土地の問題と米の問題と琵琶湖の問題では神秘主義的側面の可能性を仄めかしている。
- (7) (朝鮮は)「小中華」を自称するほど儒教的性向が強まった国で、日本との貿易はオランダに劣るくらいではなかった。
- (8) 独自の「文明」と「文化」論を挙げて、両方はいつも調和と反目を繰り返している。

- (9) (司馬氏は) 宿命的な日本人の閉鎖性、人類・人間という普遍的言葉・価値観への悲観的懸念、人類文化のエスノセントリズム的傾向を指摘した。

以上をもって、司馬氏が、社会のリーダー・知識人として実物経済にも関心を持って国のことを心配し、国の将来について積極的に呼び掛けたばかりではなく、解決策を提案し自ら実践したこと、「太平洋戦争」「満州国経営」の不当性を認めていること、日本人と日本文化の弱点や危険性を見抜いて素直に述べたこと、朝鮮儒教文化の弊害に対して率直な意見を表明したことは、肯定的に好評すべきだと考える。

反面、合理性・科学性・普遍性を根幹としながらも、倫理的・哲学的接近方法を強調している理想的・非現実的性向の可能性を指摘せざるを得ない。さらに、ここで言っている人間として守るべき「礼儀作法」は、「生活習慣と体制」化した儒教と仏教とは違うものなのかという疑問点を提起したい。そして、「朝鮮は貨幣ゼロの国」といったのと「朝鮮は日本とオランダ並みの貿易をしていた」という意見の間の矛盾と実証的資料の欠如を指摘しなければならない。

また、(反神秘主義者としての) 神秘主義的要素、歴史細分化に内在しているかも知れない多重的基準と悲観的性向が、彼の作品と歴史認識の根底に含まれている可能性を挙げたい。

3. 司馬言説の特徴と司馬史観の問題点

論者は先行研究で、司馬氏の歴史観の特徴の一つとして「時代細分化」― 本論では「歴史細分化」― を挙げたことがある。これは、「司馬史観」の象徴的表現として言われている、謂わば「明るい明治、暗い昭和」に関する分析方法として論者が名づけた用語である。まとめの資料から解るように、彼は「明るい明治、暗い昭和」の他にも、

歴史・政治・時代を事件別・人物別・時期別に決め細かく分けている。つまり、司馬氏は歴史を「線」ではなく「点」として認識しているし、その「点」のつながりを平面の「横」ではなく「縦」の関係で認識していると考えられる。だから、そこには「英雄」と「勝ち組」ばかりがあって、一般の「庶民」は無い。そして、司馬氏自らは、いくら「凛々しく猛々しい侍の原形」に憧れていて、「地味で渋い百姓」を好んだとしても、結果的には両立できない矛盾に陥ってしまったと言える。

歴史と政治においては、客観的判断を基に問題の提起はしていても、解決策または新たな思想の提案はほとんど無い。ただ、資本主義の土地問題の深刻さを呼びかけて「土地供託制」を提案し自ら実践したことは、高く評価しなければならないと思う。結局、司馬氏は思想家でもなく歴史家でもない、単なる「歴史小説家」であって、歴史に詳しい「優れたドキュメンタリー作家」であったと考えられる。

現実認識においては、「人・人類」「文化」「仏教」「土地・米」に関する表現から判断した場合、司馬氏は「理想主義者でありながら悲観的性向の人だった」と思える。これは、司馬氏自身も仄めかしているように、「仏教的無常観」みたいなもので、彼の歴史観と深く関わっていると言えるだろう。それで、彼は歴史と英雄たちに対して悲観的無常観を感じ、常に新たな英雄を待ち望んでいたのかも知れない。

司馬氏の作品の登場人物が日本人の間で「歴史の中の人物ではなく、作品の中の新たな人物として認識されている」傾向は、作品論を通して研究分析すべきであると思う。

4. おわりに

司馬氏の対談は、『司馬遼太郎対談選集、全10冊』、文春文庫、2006』の選集と単行本等を網羅するとその数が40以上もあるし、講話集と手紙

集を含めるとより膨大な量になる。論者はいくつかの小説を通して司馬氏に傾倒するようになってから、韓国人として、彼の歴史観を小説作品ではなく多様な直接的言説を対談から探ってみようと思うようになったのが本研究の動機であるが、連続研究を進めながら浮き彫りになった疑問点は、1)「歴史小説の神様」と賞賛される一方で、所謂「司馬史観」に対する極端的な批判 — 中塚明、中村政則等による — があること、2) 名高い名声にも関わらず東アジア近隣国にさえ認められていない国際的普遍性の欠如ということが、それである。

論者は、司馬氏の歴史観は、決して保守右翼に偏っているとは言えない、科学的、合理的、事実的立場に基づいているし、日本国内に向けても確かに客観的観点から問題点を提起していると思うようになった。また、これを彼の業績として評価すべきであると考え。因みに、「明るい明治、暗い昭和」はその明白な証であると挙げたい。

対朝鮮関係において、一部誤解をもたらしたのは、史料不在と事実関係不確認によるものであると判断されるわけで、この点に対する韓国人(朝鮮人)の平価切り下げの傾向は、司馬氏の客観的対朝鮮観の肯定的面を見逃してしまう危険性として指摘したい。

また、限られた5つの対談集の中の司馬氏の言説だけを取り上げて論じることによって、対話全体の論旨の核心を掴めないまま、言葉尻を捉えて言いがかりをつけてしまう — 結果的弱点として、最初から憂慮していたのだが — 可能性の印象を自らも拭えないのが率直な気持ちでもある。

最後に、司馬氏に対するより正しい国際的 — 小範囲では、東アジアと中国、韓国の — 評価を導き出すためには、彼が日本と日本人に対して指摘した問題点を、客観的立場から選別し認め受け入れることと、それについて普遍的基準による議論を通して未来志向的教訓としなければならないと思う。

参考文献

<著書>

- 1) 司馬遼太郎 / ドナルド・キーン、『日本人と日本文化』中公文庫、1972
- 2) 司馬遼太郎、『歴史を考える』、文芸春秋、1973
- 3) 司馬遼太郎、『日本人を考える』、文芸春秋、1978
- 4) 司馬遼太郎、『日本人の顔』、朝日文庫、1980
- 5) 司馬遼太郎、『日本人への遺言』、朝日文庫、1999
- 6) 司馬遼太郎、『韓のくに紀行』朝日文庫、2008
- 7) 司馬遼太郎、『耽羅紀行』朝日文庫、2007
- 8) 司馬遼太郎、『壱岐・対馬の道』朝日文庫、2008
- 9) 司馬遼太郎、『歴史の中の日本』中公文庫、1976
- 10) 司馬遼太郎、『歴史と視点』新潮文庫、1980
- 11) 中塚 明、『司馬遼太郎の歴史観』高文研、2009
- 12) 中塚 明、『日本と韓国・朝鮮の歴史』、高文研、2002
- 13) 中村政則、『「坂の上の雲」と司馬史観』岩波書店、2009
- 14) 新渡戸稲造、『武士道』PHP 文庫、2007
- 15) 山本常朝、『対訳 葉隠』講談社、2005
- 16) 旗田 巍、『日本人の朝鮮観』勁草書房、1969

<論文>

- 1) 全彰煥、『韓のくに紀行』に見る司馬遼太郎の韓国認識』、九州情報大学研究論集、第 13 巻、2011. 3
- 2) 全彰煥、『耽羅紀行』に見る司馬遼太郎の韓国認識』、韓国日本近代学会、日本近代学研究、第 33 輯、2011. 8
- 3) 全彰煥、『壱岐・対馬の道』に見る司馬遼太郎の朝鮮観』、九州情報大学研究論集、第 14 巻、2012. 3
- 4) 全彰煥、『対談に見る司馬遼太郎(1) — 対談集『日本人と日本文化』と『日本人への遺言』に見る司馬遼太郎と司馬史観批判論 —』、韓国日本近代学会、日本近代学研究、第 37 輯、2012. 8
- 5) 全彰煥、『対談に見る司馬遼太郎(2) — 対談集『日本人を考える』を中心に —』、九州情報大学研究論集、第 15 巻、2013. 3
- 6) 全彰煥、『対談に見る司馬遼太郎(3) — 対談集『歴史を考える』と『日本人の顔』を中心に —』、韓国日本近代学会、日本近代学研究、第 41 輯、2013. 8
- 7) 佐々木揚 (1980) 「日清戦争前の朝鮮をめぐる露清関係」佐賀大学教育学部『研究論文集』第 28 集、第 1 号(Ⅰ)

【資料】

大分類	小分類	『日本人と日本文化』 初刊：1972年5月 テキスト：1984年4月	『歴史を考える』 初刊：1973年10月 テキスト：2010年2月	『日本人を考える』 初刊・テキスト ：1978年6月	『日本人の顔』 初刊：1980年8月 テキスト：1984年5月	『日本人への遺言』 初刊・テキスト ：1999年2月
歴史・政治	歴史	<p>①「日本精神」という暗いナショナリズムは、昭和初期から20年までの時期までのわずかの期間のことである。〈p. 104〉</p>	<p>①(外国からの)外圧というのは元寇以来、何回かあるけれども、それもほんの皮膚磨擦程度で終った。〈p. 76〉</p> <p>②日本史において民衆レベルまでが歴史に参加できたのは、頼朝の挙兵から足利尊氏の最初の段階である。〈p. 87〉</p> <p>③山県が結局明治体制をつくるわけだけれども、「官僚国家」と「軍」の二つの根幹を握って離さなかった。これは陰鬱な明治です。伊藤がつくったのは明るい明治だともいえる。〈p. 117〉</p> <p>④明治国家は大久保の継承者である山県の作品である。〈p. 117〉</p> <p>⑤尊氏の偉大さに比べて、そのあとに始まる室町幕府というのは実にだらしない政權で、政治的没理想のモデルみたいなものである。〈p. 88〉</p> <p>⑥(会津藩の悲劇は)日本史の中でもっとも痛ましい情景である。〈p. 150〉</p> <p>⑦一人のヒーローも出さずに太平洋戦争を起こすなどというのは、よほど深刻に考えなければならぬ体質である。誰が太平洋戦争を起こしたかというのがわからない国家であるか。— 例えば、アジア侵略についても、もっと過激な無責任なことを言います。〈p. 121〉</p> <p>⑧歴史的緊張期に反革命の側に立つ会津藩としては、きわめて演劇要素の高い存在であった。〈p. 157〉</p> <p>⑨秀吉の海外伸長という自己肥大の病気を言てたのは、「時代」であったかも知れない。また、信長、秀吉は、大航海時代の潮流にのったわけである。〈p. 198〉</p>	<p>①明治から終戦までの天皇制というのは、朱子学の影響を受けたフィクションである。〈p. 21〉</p> <p>②太平洋戦争のボタンを押したのが誰なのか。いまだにわからない。今後ともわからないでしょう。こんな不思議な国でない。〈p. 43〉</p> <p>③日本の歴史は、縄文式のころから、飢えるかも知れないという恐怖心の歴史である。〈p. 89〉</p> <p>④横の関係に歴史と伝統はない。〈p. 184〉</p> <p>⑤政治家が歴史を認識して演技をする中国とは違って)日本では、徳川慶喜だけが歴史認識があった。〈p. 265〉</p>	<p>①日本には古代があったというよりも未開時代があったというべきなのではないか。〈p. 94〉</p> <p>②(鎌倉期)は、人の田地を武力で取ったことも公認する体制であったから、猛々しき競争を認めた体制とも言える。ここでアジア離れするわけである。〈p. 96〉</p> <p>③(朝鮮半島と)往来が少し不自由になるのは律令体制の出身からである。〈p. 100〉</p> <p>④律令国家をつくるのに、全部と言っていいくらいに朝鮮半島の行政経験者とか軍事経験者の渡来を仰いだわけである。それで彼ら(渡来人)は大和、今の飛鳥の辺りに住んだわけである。〈p. 100〉</p> <p>⑤百済は、人口も少なくて、五百万もいはいはいほじやないか。だけれど、五百万ごと来ても、入植できるだけの地方は近畿地方でさえたくさんあった。百済の上層階級は日本の官僚を形成するし、農民階級は山野の地主になる。〈p. 100〉</p> <p>⑥平安初期では、近畿の住民の三割までは新渡来人である。〈p. 101〉</p> <p>⑦(当時の密偵で生き残った連中)彼らの聖像は神功皇后だったことに賛成する。〈p. 107〉</p> <p>⑧常識から言って、神功皇后的な征韓行動というか、エネルギーとしない地域で成立しつこない。日本では鉄器の大量生産は六世紀からなんだから。〈p. 107〉</p> <p>⑨百済風流尊重というものが、そのまま奈良朝を経て王朝に伝わった。〈p. 138〉</p>	<p>①満州国支配には何もリアリティーがない。〈p. 69〉</p> <p>②(近代まで)世間一般では、京都の人といえども天皇という言葉は使わなかった 〈p. 162〉</p>

			<p>①国際関係というものは非常に微妙なもので、いろいろな要素が二重、三重に積み重なっている、ということが、なかなか日本人という地理的環境のなかではわかりにくい。〈p. 64〉</p> <p>②完全な分業体制は、日本の伝統的な統帥法である。〈p. 89〉</p> <p>③政治的正義というものがスローガンとしてかかげられた場合、それを打倒しようとする勢力との競合の過熱にむきよい結果を生み、そのむきよは宗教裁判に似ている。〈p. 163〉</p> <p>④西郷の征韓論の根本は対ロシア恐怖心で、征韓論から見た西郷の世界戦は理論的に見れば正しいが現実には合わなかった。〈p. 167〉</p> <p>⑤大久保が征韓論に反対したのは、朝鮮を攻めるために軍備を借りれば日本は破産するからであった。〈p. 210〉</p> <p>⑥昭和初期に信長のようにならアリス・ティックな人間がいたら、満州にアメリカの資本を入れて仲良くし、ドイツとは適当に付き合っと思ふ。〈p. 211〉</p> <p>⑦われらは、外交問題でいつも醒めた状態でいられないような「柄合の国」に生まれてきたような気がする。〈p. 213〉</p> <p>⑧安保条約の廃止に対して、観念的には賛成である。〈p. 220〉</p>	<p>①江戸時代はきらいで、戦国時代の方が好きである。〈p. 210〉</p> <p>②江戸時代には人間があまりいないし、体制は退屈だった。〈p. 221, 231〉</p>		<p>①江戸時代は、上にも下にも行けない、日本人全部に等級をつけた社会である。〈p. 20〉</p> <p>②僕は昔ばなしがきらいやし、江戸文化を何も礼讃するつもりはないが、文明が秩序美であると思えば、日本の文明は江戸時代で極まって、それで終わったのかいと思ふ。〈p. 203〉</p> <p>③中国には聖人が出る、本朝には出たことがない、というのが江戸時代の日本の儒者の劣等感だった。〈p. 259〉</p>	<p>①徳川時代は、上にも下にも行けない、日本人全部に等級をつけた社会である。〈p. 20〉</p> <p>②僕は昔ばなしがきらいやし、江戸文化を何も礼讃するつもりはないが、文明が秩序美であると思えば、日本の文明は江戸時代で極まって、それで終わったのかいと思ふ。〈p. 203〉</p> <p>③中国には聖人が出る、本朝には出たことがない、というのが江戸時代の日本の儒者の劣等感だった。〈p. 259〉</p>	<p>①戦争をしかけられたら、すぐに降参すればいい。無抵抗で、ハイ持てるだけ持っていつてくださいい、と言えらるぐらい生産力を持てれば済む。〈p. 29〉</p> <p>②私は非武装論者である。〈p. 50〉</p>
政治			<p>①古代日本地域は未開地帯だから、文明の意識と技術を身につけて朝鮮半島からやってきて文明を扶植した場合、「渡来」という言い方がリアリズムである。〈p. 103〉</p> <p>②明治の陸軍参謀本部が、日本史を、つまり明治の歴史観をつくることの母体もしくは推進役、もしくは刺激剤の役目を果たしたとというのは、私に資料がすぐなくてよくわからない。〈p. 105〉</p> <p>③日本の参謀本部がつくられたと同時に、参謀本部の一番優秀な連中がスパイになっって――主に朝鮮、中国に――派遣されるのが常例になっていた。〈p. 106〉</p> <p>④十九世紀のヨーロッパは異常の帝国主義時代で、日本が強国になるには侵略する――例えば「征韓論」――以外にないというのは心理的にあるもので、正義であった。〈p. 106〉</p>					
時代								
戦争			<p>①戦争はページェントである。〈p. 95〉</p> <p>②太平洋戦争のナショナルリズムはドイツ的なもので、ヤマト国の伝統とは関係の薄い。〈p. 105〉</p>					

[illegible]

			事的に転換しても戦争ができず うな気がする。〈p.187〉 ⑨大人口を養わなければならぬ という至上命令は、時には強迫観 念になり、時にはそれが、国家行 動の正当理由となつて、侵略を思 ひ立ったことともなる。〈p.189〉		①中国大陸の文明の伝播は、地中 海を島から島へ広がっていく形 ではなく、海を恐れる特徴があ る。〈p.93〉 ②山を裸にする技術、その技術の 上に古代冶金文明が出来上がる。 そして世界でも稀なくらい森林 の復元力の盛んな日本で、鉄器が 栄えるのは当たり前であった。 〈p.140〉	①文明(論)が合理と論理の整合 のみで展開されるとすれば、文化 は極めて非合理的なものである。 〈p.95〉 ②文化は非合理であつてこそ文 化である。〈p.95〉 ③琵琶湖に「神」を感じなければ いけない。〈p.128〉 ④エスノセントリズム、つまり、 自分の文化が最高にいいという のを、人間はもう本性に近いとこ ろに持っている。〈p.170〉	
文化	①正義というのは多分にイデオロギ ー的であり、多分に得手勝手なもので あり、抽象的なものである。〈p.137〉 ②正義は必ず滅びている。〈p.162〉 ③(今の)アジアはさまざまあるから、 単純な地域論は時代遅れである。アジ アは日本人にとって生臭過ぎるかも 知れない。〈p.218,219〉	①あらゆる思想はフィクション である。〈p.18〉 ②飢餓への恐怖心が宗教やイデ オロギーを生んでいる。〈p.90〉 ③共同幻想と細分化は下可分の ものである。〈p.145〉 ④文明をコントロールした唯一 の例外は、世界史上、徳川時代し かないんじゃないか。〈p.322〉 ⑤猛烈思想の持主が現われる場 所というのは、もうアフリカあた りしかないだろう。〈p.324〉	①人間・人類は全部、頭は平等で ある。〈p.143〉		①子供の心を持たない大人はつ まらない。〈p.64〉 ②人類とか人間というような普 遍的な言葉は、実際には実体とし て存在しなかったかもしれない。 〈p.170〉		
人・人類	①野蜚というのは、いい言葉である。 文明に対する野蜚で、野蜚の中には野 蜚の原理がある。〈p.35〉	①政治にも、人生にも教科書はな い。〈p.138〉 ②僕は歓迎様が好きですから、人 類は滅びてもやむを得ないと思 う。〈p.310〉 ③(人類は)アホな所があつて、こ の文明といずれは心中というよ うに思つてならない。〈p.314〉 ④臓器移植をして3年ほど生命を 伸ばしてたつて、別の味のことで はないと思う。〈p.324〉 ⑤(人類の問題は)偉大なる支配 者が現われて、その人物に偉大な 権力を持たせないとできない ことかも知れない。〈p.324〉					
人物	①西郷隆盛は原理性のある革命意識 を持っていた。〈p.42,49〉 ②福沢の場合は、江戸原理を否定しつ くせば日本は空っぽになつてしま う、だからこそ新原理を置かなくては ならないと考えた。そういう明快な思想家 は、彼一人だったのではないか。 〈p.51〉 ③いまこそ、福沢の原点に立ち還れ、 ということをもいい。〈p.68〉 ④安部正弘と島津斉彬が日本近代を つくつたということになる。 〈p.94,95〉 ⑤菅原道真には政治家としての資質 が非常にすくなかつた。〈p.74〉 ⑥私は西郷が好きだが、征韓論はどう 考えても結構じゃない。〈p.115〉 ⑦西郷は封建勢力も美学的には愛し						

		ながら自由民権運動も許容する、そしてそう思われる片鱗はいくつもある。 〈p.171〉 ⑦後醍醐天皇は、体を動かしての行動性とか、政治的にも哲学的にも一種のモダニズムをもっていた。〈p.133〉 ⑧信長が非常に格調の高い無神論者であったことは、世界的な意味がある。〈p.138〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本の宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず、ナマな具象性で宗教的感動が起こるのは、日本人には解り難い。〈p.191〉				
		①日本での宗教は、一大昂揚を發してもその程度で終わる。〈p.20〉 ②室町文化は禅一色で、禅は一種の合理主義である。〈p.137〉 ③表徴性が通用せず				

[illegible]